

こんにちは
教育委員です



発行：教育委員の会
〒049-4393　今金町字今金48－1
TEL:0137-82-3488［№40］ H19.5.17
E－mail:mitsuhiro.nakajima@town.imakane.lg.jp

今年も須築海岸に 子どもたちの歓声が響く

～美利河小学校「山村留学 ライオンズ釣り大会」～

５月２８日（土）、今金ライオンスクラブ（南川会長）の恒例事業である「釣り体験バスツアー」が開催されました。



当日天候は良かったものの風が強く、午前中はあまり釣れなかったのですが、ライオンズクラブの皆さんが用意してきれた昼食のバーベキューに誘われたのでしょうか。午後からは大漁となりほっけなど６０匹余りを釣り上げ、子ども達の大きな歓声が須築海岸に響き渡りました。

今年は、７名の児童と４名の先生方、自治会の方々１０名の総勢２１名の参加で、ライオンズクラブの皆さん１３名は早朝から釣り場の確保や釣り指導、バーベキューの準備など熱心な温かいお世話のお陰で今年も山村留学の貴重な思い出のひとつとなりました。

関係者の皆様に心からお礼を申し上げます。








スポーツ少年団の存在意義

日本のスポーツ少年団は、日本体育協会がその創立（１９１１年）５０周年の記念事業として「１人でも多くの青少年にスポーツの歓びを！」「スポーツを通して青少年の体と心を育てる組織を地域社会の中に！」と願い、１９６２年に創設したものです。今金町のスポーツ少年団本部は今から３９年前の昭和４３年に設立され、現在１３の加盟団体で約３００名の子ども達が活動しています。



人間の幸福は、体も心も健康で、活力に満ちた生活を営み、人と人が互いに強調・協力しあう社会で、自分の能力や個性を充分に発揮できることがあるはずです。



発育発達途上にある子どもたちにとって、スポーツをすることは非常に大切なことです。将来に向かって伸びていこうとする子ども達はどんな環境にあっても自分を見失わず、力強く豊かに生き抜く力をもつことが重要です。そして、その力を養う機会、つまり子ども達が自らの力を育てるための場は、生活と結びついた地域社会での子ども達の集団による社会活動の場であり、スポーツはその原動力となるものです。

今金町スポーツ少年団本部では、昨年から新たな二つの視点での取り組みを始めています。



一つは、多くの子ども達に本物を体験させるためのバスツアーです。野球、サッカー、バスケット、アイススケートなど３００名を超える子ども達が参加し、それぞれのスポーツへの興味を深めています。

もう一つは、加盟団体によるスポーツ少年団見学会の開催です。総合体育館を会場にそれぞれの競技を体験したり見学をしたりする機会を設け、親子で参加する子ども達も増えてきました。昨年から見学会を体験して入部するケースも出てきています。



少年団の成功には、３つのポイントがあります。

一、熱心な指導者に恵まれること。
二、母集団（育成会）があること。
三、支援組織がること。（本部、行政支援）

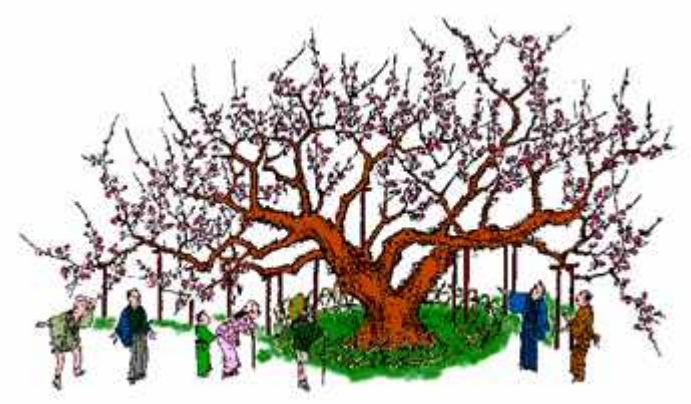
今金町は、この３つの要素が多くの関係者の理解と協力で確かな信頼が築かれています。今日も、グランドや体育館で子ども達の歓声が響いています。

委員寄稿「歳時記」




今月は、橘委員と田中委員が担当です。

＝＝＝＝＝　「梅の木」　橘　委員　＝＝＝＝＝



春、山菜を求めて山間の道を走ると、沢あいのほんの少しの平らな地に大きな梅の花の塊が見えることがある。

よく見るとその近くにこれから順に咲く桜とスモモの樹が揃ってつぼみを膨らませている。これらの木々は人の手を得ない限り三種そろって自生することは考えにくい。

そんな光景は、彼らが花を咲かせるほんのひと時だけ、かつてここに「人の住む家があった」ことを教えてくれる。豊かな生活の夢を見、その地の開墾に精を出し、家の周りに将来の夢を託して植えた往事の人々の心情が想われる。

花が終わりまわりの下草も茂り、木々も緑の葉に覆われると、もうその姿を探すことは車の上からでは困難になる。

そんな時季に、仲間との酒の席で「山の中で見事に咲いている梅の花を見た」という一人がいた。飲むほどに「多くの人に見てもらえるよう陽のあたる場所に移植しよう」ということになり、場所を確認し土地の持ち主を探し当て貰い受けることができた。

それから約半年後、小雪の舞う初冬のある日、掘り出す重機、吊り上げる大型クレーン、運搬用のトレーラーをそろえた大掛かりな移植作戦が始まった。素人の我々はスコップを杖にして、ただ重機の動きを唖然として見ているだけだった。

移植した梅の木はオランダ公園の中、バスターミナルの近くで今年も元気に花を咲かせている。

田中委員の「食・農」通信～稲作の一年～＝№2＝

遠くのユーラップ岳の残雪が映え、近くの山では白いコブシの花が咲き、次にピンクのヤマザクラが咲く５月は、下旬に田植えと言う稲作にとっての一大イベントを控え、本田の準備と育苗管理で最も忙しい月となります。

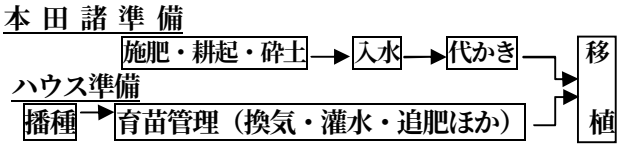
本田関係の作業は年により一部融雪促進を兼ねた土壌改良剤の雪上散布から始まり、融雪後の排水促進、心土破砕（耕している土層を作土、その下層を心土と呼んでいる）、稲ワラの処理、用水路排水路の清掃補修、畦畔の補修、田面の均平補正などを終え、肥料散布、田耕し、水入れ、代かきと続きます。田面に水が入ると例年気持ちが引き締まり、用水路の設置や開田に努力した先人達の苦労を忘れてはならないと思います。（後志利別川左岸の幹線用水路は大正後期に住吉頭首工より隣町愛知地区まで開設され、これにより開拓農家も一層定着した。）



育苗管理は、昔から「苗半作」と言われており細心の注意を払い、温度・水分・養分の調整を換気・灌水・追肥の作業で行います。移植後の環境の変化、低温等に耐えうる様に日光は十分に、他は控え気味にします。１２～１５センチの草丈で４．５葉、太くズングリとした苗が理想です。（子育ても、愛情は十分に、モノやおカネは控え気味が良いのでは・・・とエラそうに言っても、今年の苗立ち少々失敗しています。毎年一年生の繰り返しです。）



融雪期～４月｜　５月上旬　｜　中旬　｜下旬



春耕期と言われるこの時期、野鳥との出会いが楽しみです。ヒバリが空高くさえずり、セキレイ稀にキセキレイが耕した土中の虫をついばみ、木立からウグイスの鳴き声が聞こえ、代かき頃から豆播き始めてもいいよとカッコウが鳴き、ツバメが田面を飛び交います。

①ハウスの中で元気に育つ苗たち





②肥料散布



③耕起



④代かき

